

国	語
---	---

(問題)

2020年度

〈R02112064〉

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子および解答用紙には手をふれないでください。
2. 問題は3～15ページに書かれています。本文は二段になっています。試験中に問題冊子の印刷が見にくい、ページがぬけている、解答用紙のよごれなどに気づいた場合は、手をあげて監督員に知らせてください。
3. 解答はすべて指定された場所に、HBあるいはBの黒の鉛筆またはシャープペンシルでいねいに記入してください。
4. 解答用紙記入上の注意
 - (1) 解答用紙の指定された場所(2カ所)に、氏名および受験番号を正確にいていねいに記入してください。
 - (2) 指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。
 - (3) 受験番号は右づめで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないでください。
 - (4) 解答用紙は折り線のところで折ってから解答してください。
 - (5) 解答の際は、「」や「。」も一字と数えます。
5. 解答はすべて指定された解答らんに入ってください。指定された解答らん以外に何かを記入した解答用紙は、採点しない場合があります。
6. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにしてください。
7. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出してください。
8. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

アメリカの食べ物といえば、ハンバーガーとフライドポテトを真っ先に思い浮かべる人が多いだろう。だが、アメリカ人が週に三回以上食べるとされるこれらはいずれも、北アメリカ大陸に暮らしていた先住インディアン^aの食べ物でもなければ、後のアメリカ合衆国となる植民地を築いた中心勢力であるイギリス系白人のレパートリーでもない。ハンバーグはドイツ料理だし、フレンチフライのいみよ^aうからもわかるように、フライドポテトも元はフランスやベルギー式の食べ方だ。また、アメリカは世界最大のピザ消費国だが、そのピザも、イタリアが起源である。

A、こうした非イギリス起源ながら現在ではアメリカ人の食生活に欠かせない存在となっている食べ物に対しては、ファーストフード的な画一化された食というイメージを持っている人が多いだろう。だが、実際にはアメリカでは、グルメバーガーやグルメピザと呼ばれる、ファーストフードとは一線を画す路線を追求しているレストランも少なくないし、地方ごとのバリエーションもある。

例えばシカゴに行けば、シカゴスタイル・ホットドッグとか、シカゴスタイル・ピザと呼ばれるものがある。①フランクフルト(ドイツ料理)もピザもイギリス起源ではないが、さらにそれが一風変わったスタイルに進化しているのだ。シカゴのホットドッグは、フランクフルト以外にも、トマト、タマネギ、ピクルス、ハラペーニョ

などを、まるでハンバーガーのような感覚でパンに挟む一方、定番のケチャップは使わないことが多い。また、シカゴのピザは、ディープディッシュ・ピザと呼ばれ、生地が分厚く、中にソーセージやマッシュルーム、ピーマンなどが埋め込まれている。アップルパイのような形状で、パイの中身の部分にチーズとともに具がぎっしり詰まっている姿を想像してもらえばよい。一九二九年の大恐慌から第二次世界大戦にかけての食糧難の時期に、一回の食事で十分な栄養を取れるようにしようと普及した食べ方が、今やローカルフードとして定着しているのだ。

このように、典型的なアメリカ料理と思われるものは、実際には非イギリス起源であるだけでなく、世界の他のどこにも存在しなかったようなユニークな姿に変身している例もある。②一方、日本では一般にはあまり知られていないことかもしれないが、映画観賞の必需品ともいえるべき、アメリカを代表するスナックのポップコーンは先住インディアン由来の食べ物だし、フライドチキンは黒人奴隷と深い関わりを持つ。バーティメニューの定番、バーベキューに至っては、先住インディアンと黒人奴隷の両方の存在なくして成立しえなかった料理だ。

長らくアメリカ社会の実権を握ってきたのは、イギリス系の白人である。だが、このようにアメリカを代表する食べ物は、決して彼

らの食文化の遺産というわけでもなければ、よその国の食べ物の単純なコピーという存在でもない。概してアメリカは、食に^③関しては後進国のように思われがちだ。

B、人為的集団統合を宿命づけられたアメリカは、イギリスのみならず、非西洋や移民の食文化の伝統から国民的食べ物を生み出すという、実は想像以上に複雑な過程を経て独自の食文化を築き上げたのだ。

ある集団がどのような料理を食べるのか、また、いつからいかなる理由で食べるようになったのかといったことは、その集団の正体を考える重要な糸口となるはずだ。そして、アメリカの食文化は、イギリス系の人々の[※]アングロサクソン文化Ⅱアメリカ文化と単純に片づけるわけにはいかない、という事実を語っている。このことは、「アメリカは、イギリス系白人がアングロサクソン文化にその他の人々を同化させることによって国民統合を成し遂げてきた」という従来型のアメリカ観への疑問を突きつけるとともに、「アメリカ人とはいかなる集団か」、また、「アメリカ文化とは何か」という問いをあらためて提起する。

しかも、こうしたいわばよそ者の食文化が、ファーストフードという画一化への圧力を受けつつも、独自のローカルフードをも生み出してきた^b経緯は、アメリカのファーストフードの正体が単なる食の標準化現象として語りつくせないことをあじする。実際、アメリカにおけるファーストフードの成立過程は、産業社会の食の変革と深く結びついていたのであり、そこには様々な創造性もはたらい

いた。アメリカ食文化の歴史は、この国の異種混交的な背景が産業社会という器の中で新たな実験へと展開されていった軌跡でもあるのだ。

もつとも、その実験は、必ずしも良い成果ばかりを生んだわけではなかった。ファーストフードへの依存が高まるにつれ、アメリカは肥満大国と化し、低コスト化への圧力によって農業の形までもがゆがめられてしまった。だが現代アメリカでは、脱ファーストフードに向けた様々な試みが芽生えており、移民大国アメリカの食をめぐる実験は新たな段階を迎えつつある。結果的にファーストフードの黄金時代を作り上げてしまった産業社会の食の変革は、今度は健康志向や、西洋料理という枠を超越した地域横断的で大胆な食の融合を強く意識するようになってきている。[※]ベジタリアン・メニエールの開発が盛んに行われ、メキシカンボウル（メキシコ丼）のようなラテンアメリカ料理とアジア料理を合体させた新たな創作エスニック料理が登場している状況は、食文化が貧しいと思われがちなアメリカが実は豊かな食文化のポテンシャルを持っているという、常識を覆す視点へと私たちを導いてくれる。そして、こうした^cように、^④ゆうは、アメリカ発のファーストフードが世界を席卷したように、未来の世界にも大きな影響を与える可能性がある。

そもそも食べ物、人間の身体を形作る存在であり、生命の安全に関わっている。つまり、何をどう口にするかは、一見すると極めて個人的な選択のように見えるが、食材をどう生産し流通させ、どのような食事として提供するかという営みは、食の安全や人々の健

康といった公共の福祉と切り離すことはできない。個人という次元を超えた社会的合意（ないしは不服従）の次元を含んでいるのだ。

C、食べ物⑥の歴史は、人々による社会的選択（あるいはその失敗）をも体现しているのであり、そこにはその集団がたどってきた変革の記憶が刻まれている。食文化史は、アメリカ社会の価値観の変遷や対立を浮き彫りにするとともに、この国がどのように生まれ、現代アメリカがどのような社会へと向かいつつあるのかをも教えてくれる。なぜアメリカではファーストフードが発達したのか、また、現代アメリカではなぜ国境横断的なフュージョン料理が流行しているのか、さらには、農家と消費者の新たな関係を模索する動きがなぜアメリカでは広がりつつあるのかといった疑問は、アメリカという国の社会的価値観や文化的創造力のゆくえをしようしやす⑤ることに通じているのである。

このように食文化史は、アメリカという国の特質や創造性、現在位置を把握する貴重な情報を含んでいる。だが、日本で食べ物の研究というと、多くの場合は栄養学的なアプローチが中心で、外国文化研究に活用する発想はあまり見られない。しかし、上述したように、アメリカの食べ物⑥が伝える記憶に目を止めることは、この国が何をしてきたのか、何ができなかったのか、何をこれからしようとしているのかといった、アメリカという国の核心と今後の動向の両

方をより鮮明に捉えることにつながる。

普段あまり深く考えることのない、食が背負っている文化的・社会的意味こそが、実はアメリカという国の正体に迫る有力候補だ。と同時に筆者は、生命の維持に直結する食べ物に刻まれた記憶と向き合うことが、混迷する超大国の現状を打開し、変革を呼び込む系口になると考える。ここから得られる知見は、私たちが自分たちの食べ物、さらには私たち自身を見つめ直す新たなきっかけにもなるだろう。

（鈴木透『食の実験場アメリカ』より・一部改）

※レパートリー……ある人がこなせる範囲。得意とする領域や種目。

※ハラペーニョ……とうがらしの一種。

※ローカルフード……ある地域特有の食事。

※アングロサクソン……イギリス国民、またはイギリス系の人々やその子孫。

※ベジタリアン……菜食主義者。

※エスニック……民族の。民族的。

※ポテンシャル……可能性。

※フュージョン……融合。

問一 — a 「いみよう」 ・ — b 「あんじ」 ・ — c 「ちようりゆう」 ・ — d 「しようしゃ」 のひらがなを漢字に直しなさい。

問二 —

 ・

 ・

 — に入る語句をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア だが イ たとえば ウ ただし エ とすれば オ しかも カ なぜなら

問三 — ①にある漢字（料・理・起・源・一・風・変・進・化）が用いられている語句を次から二つ選び、漢字に直しなさい。

ソウイクフウ	テンベンチイ	ニッシンゲツポ	ブンプリヨウドウ	リッシンシュッセ
--------	--------	---------	----------	----------

問四 — ②「日本では一般にはあまり知られていないこと」とありますが、その具体例からどのようなことが分かりますか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア アメリカの食文化は、移民や西洋以外の人々の料理にも由来しているということ。
イ アメリカ独自の食文化は、世界の人々の労働によって支えられているということ。
ウ アメリカは、他国の人々の食文化を取り入れることには消極的だったということ。
エ アメリカの食文化は、社会的に影響力を持った人々によって作られたということ。

問五 — ③「食に関しては後進国」とありますが、それはどのような国ですか。「国」に続けられて、同じ意味となる七字の語句を、本文中から抜き出して答えなさい。

問六 ——— ④「未来の世界にも大きな影響を与える」とありますが、どういう影響が考えられますか。本文から考え、適切でないものを選び、記号で答えなさい。

ア 産業製品のようなものでなく、人々の体を考えた自然に近い食べ物が増える。

イ 人々が、自分たちの食文化がいかんにして成り立っているかを見直しはじめる。

ウ 工業化によって食生活が改良され、今よりさらに世界の画一化が進んでいく。

エ 西洋の料理にとらわれないで、さまざまな民族料理の特長を取り入れていく。

問七 ——— ⑤「農家と消費者の新たな関係を模索する動き」とありますが、その背景にある問題点が述べられている一文を、本文中から抜き出して、はじめの五字を答えなさい。

問八 ——— ⑥「食べ物が伝える記憶」が、ある国の本来の性質を考えるとときに大切なのは、なぜですか。三十六字以上四十五字以内で説明しなさい。

問九 ——— ⑦「アメリカという国の正体」とありますが、それはどのような社会ですか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア イギリス系白人の文化に、その他の国の文化を同化させることによって成り立った社会。

イ 産業の発展を中心として、異なる背景を持つ様々な文化がおのずと利用されてきた社会。

ウ 先住インディアンや黒人奴隷の文化を西洋系移民が改良することによって発達した社会。

エ 様々な文化が、大恐慌や世界大戦などの困難を切り抜けるために混交され展開した社会。

問十 本文の書かれ方を説明したものとして、最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア いくつかの出来事をもとにしてその背後にある原因を考え、それに対応するための案を出している。

イ 言いたいことを最初に強く述べてから、それを読み手に理解させるための例をいくつか挙げていく。

ウ 具体例から始めて自分の観点を説明し、それを発展させて論じた上で、今後の見通しを述べている。

エ 二つの対立的な意見を紹介して、たがいの意見の食い違点を整理し、合理的な結論を出している。

次の文章は、昭和三年に発表された小説です。読んで、後の問いに答えなさい。

要吉は、東京の山の手にある、ある盛り場の水菓子屋の小僧さんです。要吉は、半年ばかり前にいなかからでてきたのです。

要吉の仕事の第一は、毎朝、まっさきに起きて、表の重たい雨戸をくりあげると、年上の番頭さんを手伝って、店さきへもちだしたえんだいの上に、いろんなくだものを、きれいに、かざりたてることでした。①それがすむと、番頭さんがハタキをかけてまわるあとから要吉は、じょうろで、水をまいて歩くのでした。ろうざいくのよ^aうなりんごや、青い葉の上にならべられた赤いいちごなどが、こまかい水玉をつけてきらきらと輝きます。要吉は、すがすがしい気持ちで、それらをながめながら、店さきの敷石の上を、きれいにはききよめるのでした。

時計も、まだ六時前です。電車は、黒い割引の札をぶらさげて、さわやかなベルの音をひびかせながら走っていました。店の前を通る人たちも、まだたいていは、しるしばんてんや、青い職工服をきて、べんとう箱のつつみをぶらさげた人たちです。そういう人たちの中には、いつとはなしに要吉と顔なじみになっている人もありました。「よ、おはよう。せいがでるね。」

若い人は、いせいよく声をかけながら、新しい麻裏ぞうり^{あさうら}で要吉のまいた水の上を、ひよいひよいと拾い歩きにとんで行きました。なっとう屋のおばあさんが見えなくなっただと思うと、このごろでは、金ボタンの制服をきた少年が、「なっとなっとう」となれない呼び

声をたてて歩いていました。

そんな朝の町すじをながめながら、店さきをはいている時は、要吉にとっては一日中でいちばん楽しい時なのでした。なぜかというど、それから朝の食事がすむと、要吉にとってはなによりもいやな、よりわけをしなければならなかったからです。店の品ものの中から、いたみかけたのやくさり^{やくさり}がひどくって、とても売りものにならないようなのを、よりわけて、それぞれ箱とかごとへべつべつにいれるのです。

枝からもぎとられると、はるばると、汽車や汽船でゆられてきたくだものは、毎日毎日、つきからつきへといたみくさって行くのでした。要吉は、なめらかなりんごのはだに、あざのようにできた、ぶよぶよのきずにひよいとさわったり、美しい金色のネイブルに青かびがべつとりとついたりしたのを見るたんび、^②まるで自分のはだが、くさって行くようないたみを感じずにはいられませんでした。

よりわけがすむと、今度は、一山売りのもりわけです。いたみはじめたくだもの箱の中から一山十銭だの二十銭だのいうぐあいに、西洋皿へもりわけるのです。そのあんばいが、それはむずかしいのでした。

「そのくらいなのは、まだだいじょうぶだよ。」

少し、きずが大きいからと思つて、はねのけると、要吉は、すぐ主人にしかられました。それではこのくらいならいだろう、

ひとつおまけにいれといてやれと、お皿にのせると、

「そりゃア、あんまりひどいよ。よせよせ。」

と頭ごなしにどなりつけられます。

「おまけなんです。」

要吉がいますと、主人は、

「ばか、よけいなことをするな、数はちゃんときまつてるんだぞ。」と、けわしい目をしてにらみつけます。

要吉は、まったく、どうしていいのかわからなくなってしまうしました。ですから仕事がちつともはかどりません。そうすると主人は、

③「いなかッべはぐずでしょうがねエなア。」ときめつけます。

要吉は、そういわれると、ただ、もじもじと赤くなるばかりでした。

でも、このごろはだいぶ仕事のこつがわかつてきました。要吉は、せっせと手を動かしながら、いろんなことを考えるようになりました。

——せっかく、方々の国から送られてくるこれらのおいしいじゆくしたくだものが、店にかざられたまま、毎日毎日こうもたくさんくさって行くのはどうしたことだろう。それでいて、毎日おかみさんが売り上げの中から、まとまったお金を銀行へあずけに行くところをみると、お店は損をしているはずはない。それではこれだけのくさったくだものの代はだれが払_{はら}ってくれるのだろうか。

それから先は要吉にはどう考えてもわかりませんでした。

一山いくらのお皿の上には、まっ黒くなったバナナだの、青かびのはえかけたみかんだの、黒あざのきたりんごだのがのっていました。

「こんなにならないうちに、なぜもつと安くして売ってしまわないんだらうなア……安くさえすれば、もつとどしどし買い手があるだろうに……。」

要吉の考えとしては、それがせいっぱいでした。

夜になると、要吉には、もつともつといやな仕事がありました。

要吉は、毎晩、売れ残ってくさったものを、大きなかごに入れて、鉄道線路のむこうにあるやぶの中へすてに行かなければなりませんでした。ごみ箱がすぐいっぱいになるのをいやがるおかみさんは、そのやぶを見つけると、夜のうちに、こッそりと、そこへすてに行けといいつけたのです。

要吉は、うんざりしてしまいました。それで、ある時、要吉は思いきって、おかみさんにいってみました。

「こんなにならないうちに、なんとかして売ってしまうわけには行かないもんでしょうか。安くでもして……。」

そうすると、おかみさんは、要吉をにらみつけていいました。

④「なまいきおいでないよ。なんにもわかりもしないくせに。そうそう安売りした日にゃア商売になりやアしないよ。」

「でも……」要吉は、もじもじしながらいいました。

④「すてっちまうくらいなら、ただでやった方がまだましですね。」

要吉は、それをいったおかげで、晩の食事には、なんにももらうことができませんでした。要吉は、お湯にも行かずに、空_すき腹_{はら}をかかえて、こちこちのふとんの中にもぐりこまねばなりませんでした。

要吉は、その晩、ひさしぶりにいなかの家のことを夢に見ました。

ある山国にいる要吉の家のまわりには、少しばかりの水蜜桃の畑がありました。梅雨があけて、桃の実が葉っぱの間に、ぞくぞくとまいる頭をのぞかせるころになると、要吉の家の人々はいっしょになって、そのひとつひとつへ小さな紙袋をかぶせるのでした。要吉の家では、その桃を、問屋や、かんづめ工場などに売ったお金で一年中の暮らしをたてていたのです。夏の盛りになると、紙袋の中で、水蜜桃は、ほんのりと紅く色づいてきます。要吉たちは、それをまた、ひとつひとつ、まるで、宝玉でもあるかのように、ていねいに、ソツともぎとるのでした。ですから、自分の家の桃だといつても、要吉たちの口にはいるのは、虫がついておこったのや、形が悪いので問屋の人にはねのけられたのや、そういった、ほんのわずかのものでした。

要吉は、ある年、近所へ避暑にきていた大学生たちが、自分の家のえんがわへ腰をかけて、一粒よりの水蜜桃をむしゃむしゃと、まるで馬が道ばたの草をでもたべるようにたべちらすのを見た時のうらやましい驚きをいつまでも忘れることができませんでした。

——あんなに大事にしてそだてあげた水蜜桃も、こうした東京の店へくれば、まるで半分は、函づみのままにくさって行くのだ。

要吉はくやしさに思わず、太ったおかみさんのからだをむこうへつきとばした夢を見て目をさました。

と思うと、今度は、やぶの中へすててきた、ネイブルだの、バナナだの、パイナップルだのが、ひとつひとつ、びよんびよんとどび上がって、要吉の胸の上で、わけのわからないダンスをはじめまし

た。そうすると、いつのまにか、いなかのおとうさんや妹たちの顔が、それをとりまいてめずらしそうに見物しています。

⑥——ほんとうに、家の人たちは、まだバナナさえも見たことがないのだ。要吉は、夢の中で、そういいながら、ごろんとひとつ寝がえりをうつと、昼間のつかれで、今度は夢もなんにも見ない深い眠りにおちて行きました。

朝のうちに、店の仕事がかたづく、要吉は、自転車にのって、方々の家へ御用聞きにでかけなければなりません。それはたいてい、大きな門がまえのお邸ばかりでした。

勝手口へは、どこの家でも、たいがい女中さんがでてくるのでした。「それではね、いちごを二箱と、それからなにかめずらしいものがあつたら、いつもくらいずつ、届けてくださいな。」

そういつたおおような注文をする家が多かったです。要吉は、それをひとつひとつ小さなてちょうにかきつけました。

昼からになって配達がすむと、今度は店番です。つきからつきと、いろんなお客がやってきます。

「なるべく上等なやつをいろいろまぜて、これだけかごにつめてくれ。ていさいよくのしをつけて。」

そういつて、新しい札をボンとなげだす人もあります。かと思うと、一山いくらのところあれこれと見まわってから、ごそごそと帯の間から財布がわりの封筒をとりだす、みすばらしいおばあさんもあります。

「きんかん、これだけおくれ。」

そういつて、いくらかの銅貨を店さきになげだす子どももありました。

そういうお金のなさそうな人を見ると、要吉は、うんとまけてやりたいた気がしました。どうせ、売れ残ればすててしまうのだから、買いたくつても買いたくつても買えないような人たちには、どしどしたくさんやつたらよさそうなものだと思います。しかし、そんなことをしようものなら、主人やおかみさんに、しかられるだけならまだしも、こッぴどい目にあわされるにきまっています。

いつか、きたないなりをして、髪をもしゃもじゃにしたそれはそれは小さな女の子が、よごれた風呂敷ふみしきづつみをぶらさげて、店の前にたつていたことがありました。それは、朝鮮ちやうせんあめを売って歩く子だったのです。女の子は、いかにもほしそくに、店の品ものをながめていました。

要吉は、かわいそうになったものですから、いきなり、きずものバナナをひとつかみつかんで、女の子にもたせました。と、奥からでてきたおかみさんが、ふいに要吉をどなりつけました。

「なにをしてるんだい。」

「え、あの、ローズものを少しやっただけです。」

「よけいなことをおしでないよ。」おかみさんは、いきなり、うしろから要吉のほッぺたをびしゃんとなぐりつけました。「やってよけりゃア、わたしがやるよ。……そんなことをした日にゃア、店の品ものが安っぽくなってしまうがなじゃアないか。」

要吉は、そんなことを思いだすと、みすみすするもんだとは思

いながらも、貧乏びんぼうなおばあさんや子どもに対しても、みかんひとつまけてやるのができませんでした。

要吉は、なんとということなく、毎日毎日の自分の仕事がつまらなくなつてたまらなくなるのでした。

要吉は、また、ある日、おやしきへ御用聞きに行きました。すると、ちょうどお勝手口へでていた女中が、まっ黒くなったバナナをごみ箱へすてていました。

「おや、どうなすつたんですか。こないだお届けしたのは新しかったはずですが。」

要吉は、びっくりして聞きました。

「なアに、これは、もうせんにとつといたのよ。」と女中はいいました。『到来とうらいものやなんかが多くつて、奥でめし上がらなかつたもんで、しまつといてくさらしちゃつたのさ。』

女中は平気な顔でいいました。しかし要吉はなんともいえないくやしい気がしました。

「もつたいない話ですね。そんなににならないうちに、だれかめし上がる方はないんですか。」

「ああ、お許しがでないとあたしたちもただけやしないからね。それに、」と女中は妙な顔をして笑いながらいいました。「そんなに心配しなくつたつていいわよ。こつちでかつてにくさつたんだから、またいくらでもとつてあげるわよ。お金さえ払やア、おまえさんの商売に損はないじゃアないの。」

「それはそうですけれど……」

要吉は、なんとなくむかむかするといっしょに悲しい気持ちになりました。店でくさらせるばかりでなく、こうして、おやしきの台所へきて、まだ、たべる人もなくくさらせる。大ぜいの人々の手をかけて、やつのことまでここまで運ばれてきたとうい品物がだれにもたべてもらえずにくさって行く。ただ、ごみ箱へすてられるためにばかり運ばれてくるとして、それでいいものだろうか。しかし、一方には、くさりかけた一山いくらのものでさえも、十分にはたべられない人々が大きいのに。

「ああ、今夜もまた、あのやぶへ、くさりものをすてに行かなければならないのか。」

そう思うと、要吉はなんともいえないいやな気持ちになりました。商売というものが、どうしても、こういうことを見越してしなければならぬものだったら、なんといういやなことだろう。

しかし、要吉は、水菓子屋の店をとびだすわけには行きませんでした。要吉が徴兵検査まで勤めあげるといふ約束で、要吉の父は、水菓子屋の主人から何百円かのお金をかりたのです。

いくら考えても、要吉には、商売のためにはたべられるものをくさらせていいというりくつはわかりませんでした。

「大きくなったらわかるだろう。」要吉はそういつて自分をなぐさめるよりほかはありませんでした。

「それに年期があけたら、自分でひとつ店をだすんだ。そうすればけっして、品物をむざむざとくさらせるようなことはしやしない。くさりそうだったら、ただでも人にたべてもらう。」

要吉はそうも考えてみました。しかし、それは、要吉が大きくなってみなければ、できることだかどうかわかりません。

「……その上に、おやしきなどで、たべもせずすててしまうのは、いったいどうしたことだろう。」

これは、なおさら要吉ひとりきりでは解決できない問題でした。要吉は、女中の平気な顔を思いだすと、ただなんとなく、腹がたつてたまりませんでした。

「みんな、ものねうちをしらないんだ。」

要吉はしばらくして、こうつぶやきました。しかしそれだけでは要吉の胸の中につかえている重くらしい塊は少しも軽くはなりませんでした。

(木内高音「水菓子屋の要吉」より・一部改)

※黒い割引の札……当時の路面電車で用いられた早朝割引の札。

※しるしばんてん……印半纏。氏名などを染め出した短い上着。

※女中……家事などを手伝う女性。

※おおうよう……小さなことにこだわらないさま。

※のし……熨斗。贈り物につけるかざり物。

※朝鮮あめ……古来よりある熊本^{くまもと}の和菓子。

※ローズもの……売り物にならなくなったもの。

※もうせん……ずっと前。以前。

※到来もの……他人から届いた物。贈られた物。

※徴兵検査……戦前、男性が兵士になるために受けた検査。

問一 ——— a 「ぎいく」(さいく) ・ ——— b 「じゆく」 ・ ——— c 「なまいき」 ・ ——— d 「てちよう」のひらがなを漢字に直しなさい。

問二 ——— ① 「じようろ」は、植物に水をやる如雨露のことで、外来語です。外国語に、音だけでなく意味も表せるように、「雨や露の如し」と漢字を当てはめたとされています。次の中から、同じようにして作られたと考えられる言葉を二つ選び、記号で答えなさい。

ア 極光 オホロク イ 麦酒 ビール ウ 合羽 カッパ エ 秋桜 アキオウ オ 型録 カクログ カ 紅玉 ベニヒメ

問三 ——— ② 「まるで自分のはだが、くさって行くようないたみを感じずにはいられませんでした」とありますが、なぜこう感じるのですか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア くだものは自分の身の上と重なって感じられる愛すべきものだから。
イ 都会の生活に対し恐れやいらだたしさを日ごろから感じていたから。
ウ 店の人からいなか育ちであることを馬鹿にされていると感じたから。
エ いなかでくだものの美しさやおいしさをよく知らず育ってきたから。

問四 ——— ③ 「要吉は、そういわれると、ただ、もじもじと赤くなるばかりでした」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 東京に来たばかりで、なかなか都会のやりかたになじめない自分はずかしかったから。
イ よりわけの基準が分からず、ただしかられるばかりで、ひどくとまどってしまったから。
ウ 仕事ができない理由を出身地や方言のせいになされて、主人に怒りがこみあげてきたから。
エ 働き出したばかりなのに難しいことをおしつけられて、自分があわれに思えてきたから。

問五 — ④ 「すてっちまうくらいなら、ただでやった方がまだましですわね」とありますが、「おかみさん」がそう考えないのはなぜですか。

それが分かる部分を、「……から。」に続けられるように、—— ④より後の本文中から一九字で抜き出して答えなさい。

問六 — ⑤ 「うらやましい驚き」とありますが、なぜこのように感じたのですか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 働く必要がない大学生という人たちがうらやましく感じて、自分も都会の学校に行きたくなったから。

イ 苦勞して育てた桃を食欲のまま食べる姿が、自分にはとてもゆるされない自由なふるまいだったから。

ウ 虫がついたり形が悪かったりする桃を食べる姿が面白くて、基本的な生活観の違ちがいを感じ取ったから。

エ 苦勞して育てた桃を無感動に食べる姿がめずらしく、自分もぜいたくな暮らしをしたいと思ったから。

問七 — ⑥ 「ほんとうに、家の人たちは、まだバナナさえも見たことがないのだ」とありますが、この時の「要吉」の心情として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア めずらしくて高価なくだものを、いなかの家族の元へ送りたい気持ち。

イ 桃とくらべものにならないほど高価なくだものに、あこがれる気持ち。

ウ 店でいやな仕事ばかりやらされたため、いなかの家族が恋こしい気持ち。

エ いなかと都会の生活の差を深く思い知らされて、やりきれない気持ち。

問八 — ⑦ 「うんとまけてやりたい」とありますが、それを言いかえたものとして、最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 大幅はばに値引きしてあげたい

イ いっそただにしてあげたい

ウ そっとなぐさめてあげたい

エ こっそり交換こうかんしてあげたい

問九 ——— ⑧ 「要吉は、なんとなくむかむかするといっしょに悲しい気持ちになりました」とありますが、この時の「要吉」の心情を、三十

六字以上四十五字以内で説明しなさい。

問十 ——— ⑨ 「もののねうち」とありますが、「要吉」「女中」「おかみさん」のそれぞれにとって、「くだもの」とはどういうものですか。その

説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 要吉にとっては売りがいを感じられる商品、女中にとっては自分の生活を成り立たせるもの、おかみさんにとっては家族をやしなうための大切なもの。

イ 要吉にとっては将来の夢を感じさせてくれるもの、女中にとっては日々の生活をうるおしてくれるもの、おかみさんにとっては自分の人生と一体化しているもの。

ウ 要吉にとってははどうてい手の届かないあこがれのもの、女中にとってはいつでも手に入るような日用のもの、おかみさんにとっては自分の生計を立てるためのもの。

エ 要吉にとってはいなかの大切な思い出を感じさせるもの、女中にとってはあまり口に入らない貴重なもの、おかみさんにとってはどうあつかつてもかまわないもの。

オ 要吉にとってはおいしく食べるべき大切なもの、女中にとっては見慣れているがかかわりがあまりないもの、おかみさんにとっては少しでもお金をもうけるためのもの。

〔以下余白〕

